

エー A ジー G ファイブ 5 だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

AG5の2020年度の取り組みとその成果

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG5 (Advanced Global Five) プロジェクト)は4年目を終わりました。ただ、2020年度はこれまでと様相を異にしています。2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが在外教育施設に深刻な影響を及ぼしました。AG5も大きな影響を受けましたが、困難な状況の中でどのようなことに取り組んだか、そしてどのような成果があったかについて報告します。



一 新型コロナウイルス感染症への対応

コロナ感染症は、これまでの教育を大きく変えました。先生も子どもたちも学校に一堂に会して、対面で授業をやるという当たり前のことができなくなりました。

この未曾有の事態に直面し、各学校はオンラインなどでの学習を余儀なくされました。国内外を問わず、先の見通せない状況にあつて、「子どもの学びを止めない」ための取り組みが始まりました。このプロジェクトでも厳しい状況のもとで多様な取り組みが行われました。各学校の奮闘ぶりには頭が下がります。詳細はAG5のポータルサイトを参照してください。

これまでこの事業の評価の観点として、①学校全体で取り組んでいるか、②先生の実践力の向上につながっているか、③子どもの学習成果が向上しているか、そして④この事業を通して他の学校の実践にも役立つモデルやプログラムの開発ができたか、という四点を示してきました。四年目を迎え、特に四番目の観点が重要になりますので、そこに焦点化して二〇二〇年度の取り組みの概要とその成果について報告します。

二 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

香港日本人学校香港校小学部では、グローバルな能力を育成するための実践に取り組んできました。二〇年度の課題は、「グローバルスタディーズ」の実践の評価に焦点をあてました。グローバルクラスのプレゼンテーションスキルや英語力の向上を目的に、夏休み後にオンラインで実施した自由研究発表会の成果をどう評価するかが課題です。

そこでこうしたバフォーマンスを評価するためのルーブリック指標を作成し、評価法について検討、公表しました。これまでの実践を広く他の日本人学校でも活用できるように、「日本人学校における「探究学習」のすすめ」実践ガイドブック「第一部 理論編」の小冊子を作成しましたので、ぜひ参照してください。シンガポール日本人学校は、クレメンティ校、チャング校の両校で探究学習を進めてきましたが、探究科と他の教科とをどのように関連づけるか、探究科におけるSOLOの取り組み、そしてIBの視点を取り入れ



シンガポール日本人学校 小5 東京学芸大学附属大泉小学校とのオンライン交流会で「シンガポールの魅力」をプレゼンテーション

たカリキュラムフレームワークづくりなどを進め、その成果を報告書にまとめていきます。

この他、香港とシンガポールの両日本人学校間での探究学習に関する情報交換会を開き、実践を共有したのも成果の一つです。さらに国内の研究協力校である東京学芸大学附属大泉小学校とクレメンティ校とで探究学習に関する交流学习を行いました。一つのテーマをもとにした学校間交流は他の日本人学校でも参考になるものです。

パリ日本人学校では、日本国内の五つの研究機関(情報通信研究機構、宇宙航空研究開発機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構、科学技術振興機構、日本原子力研究開発機構)によるオンライン講座をもとに探究学習を行いました。

そして、子どもたちが「学びの地 図・新聞」づくりを進め、さらに提言書も作成し、「パリ日提言フォー

ラム」で発表しました。

公の場での発表は子どもたちの成長につながります。パリ日本人学校の実践は、思考のスキル、コミュニケーションやコラボレーションのスキル、ICTリテラシー、さらには市民性の育成など二十一世紀型スキルを身につけるために学校全体で探究学習に取り組んでいるのが特徴です。探究学習で何を指すかをこの実践から学ぶことができます。

三 日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

一九年度から開始したマニラと大連、青島の日本人学校での取り組みは、二〇年度はコロナで始まりコロナで終えました。こうした状況にもかかわらず、マニラ日本人学校ではこれまでの実践を『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導』マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から』という報告書として刊行しました。

日本語学級一〜三年生の教科横断型の学習活動と四〜六年生の在籍学級での授業が紹介され、日本語指導が必要な子どもたちの変容や指導の効果・課題が具体的に示されています。

す。特に、在籍学級の学習に参加・活躍できたことで、自信を持ち学ぶ意欲を高めていく子どもたちの様子が報告されています。他校で日本語指導を進めていく上でのヒントがたくさんあります。

青島日本人学校では、小一・二の課外の日本語指導、中一〜三を対象にした個別の日本語指導、そして在籍級での国語の授業での日本語指導の取り組みを行いました。特に、担任の先生と日本語指導の先生が連携し、教科内容についてあらかじめ学習させたり、わからないところを補充したりするような取り組みを行っています。この連携が日本語学習では重要です。

また、全校あげて多文化共生の学校づくりを目指して多様な取り組みを行っており、成果を『多文化共生の学校づくり』青島日本人学校の実践』として刊行しました。日本語指導も多文化共生の視点からの取り組みが求められますので、こうした実践は今後ますます重要になるでしょう。大連日本人学校は、在籍学級の教科指導における日本語指導プログラムの開発を進めています。小一・四・六では国語の中で日本語指導を行っています。視覚的な支援や表現支援を重視した指導計画の改善を図り



大連日本人学校 小1 インタビューでわかったことを発表・共有

ました。中一の総合的な学習ではバイカルチュラルの視点や対話を重視した日本語指導を導入していますが、これについても実践を踏まえて指導計画の改善に取り組みしました。

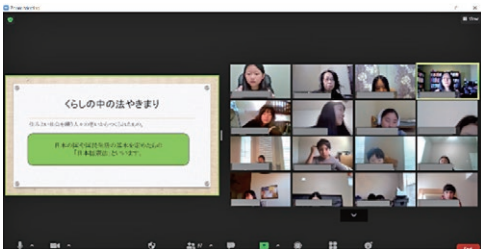
このプロジェクトは三校での取り組みを踏まえ、日本人学校における日本語指導の進め方についての研修会を二〇年十一月にマニラ日本人学校を中心にオンラインで実施しました。日本語指導に関する授業づくりやICTを活用した実践と課題などをテーマに研修会を行い、三校以外の日本人学校からの参加もありました。学校をこえた教師研修の在り方を考える上で大いに参考になります。

四 補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

これはダラス補習授業校を中心に

したプロジェクトですが、多くの補習授業校との連携の輪が広がっています。二〇年度はコロナ禍で補習授業校では対面授業ができない事態になりましたが、四月早々に「AG5 補習授業校情報交換会（ウィルス対応策）」をオンラインで開きました。三十六校から五十六人の参加があり、情報交換と対応について話し合いました。その後、厳しさを増す中で「オンライン授業の課題」、五月には「遠隔授業と評価」といったテーマでミーティングを行い、多くの補習授業校関係者が参加しました。それだけ関心があり、切迫した状況にあったということでしょう。

この情報交換会は、二一年一月までに合わせて二十回実施され、参加者は各回四十〜一〇〇名で参加者



ダラス補習授業校 小6 ZOOMでの社会科授業

ストは五七〇名に達しています。

また教員研修として、補習授業校の「初任者を対象とした研修会」を五回行い、十九校から六十名の参加がありました。

これは日本語力も英語力も多様な子どもたちが共に学び、成果を日本語で発信できるように、教科横断型の実践を支援するプロジェクトです。

二〇年度は学習活動計画を五校で七単元作成しました。詳細はAG5のポータルサイトをご参照ください。

AG5の活動を通して補習授業校のコンソーシアムが構築され、相互に課題を解決できるような仕組みができています。このプロジェクトの四年間の成果を見ると補習授業校のこれまでの支援の在り方を大きく転換したように思います。つまり、

個々の先生の力量を形成するというより、対話と話し合いをもとに課題解決を図り、参加者全体の力量を高めていこうとしています。これまでは学習計画や指導案などを作成し、それをもとに個々の先生の力を高めるような支援を行ってきましたが、それだけでは先生の力量はつきません。このプロジェクトは、多くの学校・多様な関係者が集まり、対話から複数の視点を引き出し、そこからそれぞれ実践の方向を探るといったもの

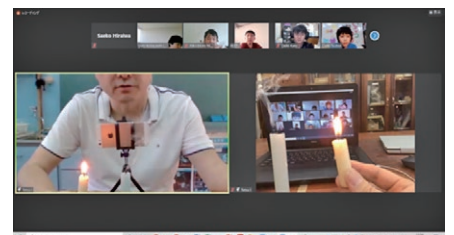
です。こうした取り組みが補習授業校関係者の内的な自立を高めていくことにつながります。

五南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

このプロジェクトでは四年間アスンシオン日本人学校の先生とアスンシオン日本語学校の先生とで国語や日本語の指導に関する合同研修会を実施してきました。コロナ感染症が南米でも広がる中、二〇年度はオンラインで日本人学校の先生が日本語学校の子どもを対象にして出前授業を六回行いました。

対象はアスンシオン日本語学校の子どもですが、今回はパラグアイの全ての日本語学校の先生に開放しました。自主参加の研修でしたが、毎回四十〜五十人が参加しました。これもオンラインだからこそ可能になったことです。

このプロジェクトのねらいは日系人社会や日系人の子どもの教育への貢献がどうしたら可能かを示すことにあります。今回の理科の出前授業は、日本語学校では経験し得ない実験を行いながら科学的思考力を伸ば



アスンシオン日本人学校の教員による日本語学校へのオンライン授業

副読本活用事例集



す取り組みでしたが、こうした日本の教育を具体的実践を通して伝えていくことは有効な方法だといえます。

さらにアスンシオン日本人学校では現地理解教育の一環として、社会科副読本『私たちのパラグアイ（第三版）』や移住すごろく、移住かるたを作成しました。日本語学校での移住学習にも役立てられています。

六学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発

西大和学園カリフォルニア校の取り組みは、学校の持つリソースを地域に開放して日本文化や日本語の学習に役立ててもらい、結果として親日的な人材を育成することを目指すものです。しかしコロナ感染症の影響がカリフォルニアでは極めて大きく、交流や外部の方との接触もできない事態になりました。

このプロジェクトの主目的である日本文化を地域に発信し、日本人学校と地域の学校との効果的な連携を図る取り組みを実行することが困難になったのです。そこで、図書館の効果的な活用をどう進めるかという観点での取り組みを行いました。思考力を高めるためのデジタル図書



西大和学園カリフォルニア校デジタル図書館



サンホセ日本人学校 アグアスカリエンテス
日本人学校とオンラインで交流

活用とその有効性について在校生を対象にして検証を行っています。

日本の生活や文化に直接触れる機会が少ない海外にあつて、デジタル図書は子どもたちの思考力や想像力を高めるのではないかとという仮説のもと、デジタル図書の有効性について検証するものです。今後、その成果をAG5のポータルサイトに公開する予定です。

7-ICTを活用した遠隔での 教員研修及び授業実践の プログラム開発

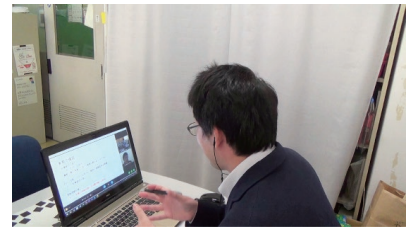
二〇年度は、中南米もコロナ感染症の猛威がふるい、各学校ともオンライン授業の対応に迫られました。こうした状況に関わらずサンパウロとリオデジャネイロ、アグアスカリエンテスとサンホセの各日本人学校を結んだ遠隔合同授業がそれぞれ行われました。

このプロジェクトの一つの成果として遠隔合同授業のためのノウハウを「パターンランゲージ」としてまとめました。パターンランゲージとは、一九七〇年代に開発された手法で、経験豊かな人から「コツ」を抽出し、他の人がやってみたくなるヒントとして提示する方法です。何かを始めればいいかわからない時、あるいはやってみてわからないことがあつた時、パターンランゲージを見て「こんな方法があつたのか」と参考にするものです。

詳細はAG5のポータルサイトを参照してください。毎月、四校が集まるオンラインでの遠隔研修会での実践報告を通して作成したもので、遠隔授業や研修会の実践の指針になるものです。こうした「パターンランゲージ」はこれから遠隔の合同授業や研修会を行う日本人学校でも役立つものです。

八 日本人学校における特別支 援教育に関する遠隔指導の 実施に向けた実践的研究

この事業では、一九年より日本人学校における特別支援教育への支援を行っています。特に、遠隔での支援の在り方について検討するものです。そこで、日本人学校と特別支援



筑波大学附属大塚特別支援学校による日本人学校への遠隔指導

学校が共有できる「特別支援遠隔相談予約システム」(仮称)を導入し、遠隔支援を開始しました。

北京日本人学校と筑波大学附属大塚特別支援学校、ハノイ日本人学校と埼玉大学教育学部附属特別支援学校、その他協力機関である国立特別支援教育総合研究所、海外子女教育振興財団で共有できる外部フォルダを設定し、対象児童の状況がコンサルテーションの前に確認できるよう、「遠隔支援実践シート」、「授業動画等」を共有するようにしました。

こうしたシステムで日本国内の特別支援学校からの指導のもと日本人学校支援を行った結果、対象の子どもにも変化が見られ、遠隔指導の効果を確認できました。

二〇二〇年度の成果

二〇年度はコロナで始まり、コロナで終わりました。まだまだ終息の

兆しも見えません。こうした中で試行錯誤し、子どもたちの学びを止めない努力をされ続けている関係各位に改めて敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

二〇年度の成果としてICTの活用が進んだことが挙げられます。学校全体でICT教育に取り組み、先生方のICTスキルは格段に向上しました。学校や国の枠をこえた実践が可能になり、このことは海外子女教育の在り方を大きく変えていくように思います。また、香港日本人学校、マニラ日本人学校、青島日本人学校の実践の成果を冊子にまとめ、さらにポータルサイトにもアップしましたが、これらは他の日本人学校にも参考になるものです。

この四年間の取り組みの成果が他の日本人学校や補習授業校にも広がっています。特に補習授業校のプロジェクトは、世界的な補習授業校のネットワークに成長していますし、マニラ日本人学校の教師研修などの取り組みも広がりを見せています。

二一年度はいよいよ最終年度です。まだまだコロナ感染症の影響はありますが、これまでの成果をわかりやすく発信し、他の在外教育施設の取り組みの参考になるようにしていきたいと思っています。